

# お由良の罪

野村胡堂

—

「親分、変なことがありますよ」

「何が変なんだ。——まだ朝飯も済まないのに、いきなり飛び込んで来て」

五月のよく晴れた朝、差当って急ぎの御用もない銭形平次は、八五郎でも誘つて、どこかへ遊びに行こうかと言つた、太平無事なことを考えている矢先、当の八五郎は少しめかし込んだ恰好で、飛び込んで来たのです。

「それがね、親分」

ガラッ八は少し言いにくそうでもあります。

「めかし込んでいる癖に、ひどく取乱しているじゃないか。火事か喧嘩か、そ

れとも借金取りか」

「そんなのじゃありませんよ——今日は飯田町のお由良ゆらといっしよに亀戸の天神様へ藤を見に出かける約束で、朝はやく誘いに行くと——」

ガラツ八は少しばかり照れ臭い顔になりました。

「お由良？ あの柳屋の評判娘かい——あの娘は伶俐りこう過ぎて付き合にくいよ。——世間で騒ぐほど綺麗じゃねえが、お前にはお職過ぎらア、付き合わねえ方がおためだぜ」

「意見は後で承うけたまわるとして、まアあつしの話聴いて下さいよ。そのお由良を誘いに行くと、昨夜から帰らないって、柳屋の親爺が蒼くなっている騒ぎでさ、知り合いや近い親類も訊いたが、どこへもこの二三日顔を出しちやいない。——夜逃げをする程の不義理もないから、もしか」

八五郎はまたゴクリと固唾かたずを呑みました。

「誘拐かどわかされてもしたんじゃあるまいかという話だろう。——あの眼から鼻へ抜けるような伶俐者のお由良が、金紋先箱で迎いに来たって騙だまされて行くものか」

「それじゃ駈落かけおち——」

「駈落なんてえのは馬鹿のすることだよ。本所の叔母さんとか、湯島の従妹いとことかのところへ行っているんだろう」

「そんなのはありませんよ。どうかしたら？」

「待ってくれ、伶俐者のお由良だけに気になるぜ。近ごろ懇意にしている男でもなかったのか」

「近いうちに、伊勢屋の治三郎と一緒になるという話はありませんがね」

「それじゃお由良には玉の輿こしだ。祝言前に評判を立てられるようなお由良じゃあるめえ。——こいつは変だよ、もう一度行って見るがいい」

「ね、親分」

ガラッ八の八五郎は一生懸命でした。そのころ飯田町の飲屋の看板娘かんばんでお由良というのは、色の浅黒い丸ぼちやの二十歳娘で、さして綺麗ではなかったのですが、滴したたる愛嬌と、抜群の才気で、見る影もない小料理屋の娘ながら、神田から番町へかけての人気を呼んでいるのでした。

一寸ちよつと一パイの折助や手代から、二階へ押し上がって大尽風だいじんかせを吹かせる安旗本の次男三男、大店おおだなの息子手合まで、お由良の愛嬌おほに溺おほれる者も少なくなかった中に、ガラッ八の八五郎もさんざんお賽銭さいせんを入れ揚げた講中の一人で、三月越し執拗つもしりに口説いた拳句、近く足を洗うお由良も最後の奉仕の心算つもしりで一日店を休んで亀戸の藤見に——それも三四人の友達附でやっと付き合う約束のできたところを、いざという日の前の晩から行方不知になったのですから、ガラッ八の驚きよの並大抵ではなかったのも無理はありません。



銭形平次も、何にか知ら、突き詰めた八五郎の顔を見ると、いつもの調子でからかつてばかりもいられないような気になるのです。

それからものの四半刻（三十分）ばかり。

二度目に飛び込んで来たガラツ八は、今度こそ本当に逆上<sup>のほせ</sup>あがっておりまして。

「親分。た、大變」

「さア、来た——その大變が来そうな空合だったよ。お由良がどうしたんだ」

「死んでいましたよ、親分」

「何？ 死んでいた——矢張りそんなことだったのか、どこで死んでいたんだ」

「水道橋の下手<sup>しもて</sup>——上水の樋<sup>とひ</sup>の足に引っ掛っていたのを、船頭が見付けて引揚げましたが、もう虫の息さえもねエ——可哀想に——」

「泣くなよ、八。身投げをするようなお由良じゃないが、踏み外したのか、そ

れとも突き落されたのか」

「それが解らないから、親分へ相談に来ましたよ。元町の仙太親分の見込みは、お由良を附け廻したぞりしていた浪人者の織部鉄之助か、上総屋の番頭の金五郎か、大工の若吉か下刺したぞりの幾松が怪しいって言うが——」

「待ってくれ、そんなに下手人があっちゃ、命が七つ八つあってもお由良は免のがれようはねエ」

「そのほかに、お由良と張り合っていたお美代も、お松も怪しい——」

「やり切れねエなア、そうなりや、八五郎だって怪しかろう。近頃はお由良のことというと、夢中だったぜ」

「親分、どうしたものでしょう」

八五郎はドツカと腰をおろしました。少し眼の色が変わっているようです。

お由良の死骸は、水道橋の橋詰に三文菓子あきなを商っているお関の家にかつぎ込み、そこで検屍を受けてから飯田町の家へ運ぶことになりました。

お関はお由良の亡くなった母親と懇意で、お由良の相談相手でもあり、良い小母さんでもあったのですが、お関の一人息子で——ツイ三崎町の海老床えびどこで下剃をしていた幾松が、気が少し変になって、家へ引取られてブラブラしているようになってから、お由良の足も遠退きましたひきしまが、鼻の先の水道橋下から死体になって引揚げられると、やはりお関の家の庇ひさしの下で、諸人の好奇の眼から、死骸の恥を蔽おおうてやる外はなかったのです。

顔の古い御用聞——元町の仙太も、お由良は投身なんかする女ではないと睨にらんで、誰彼の差別なく引括くくりそうな剣幕でしたが、関係者があまり多かつたの



で、どこから手を着けていいか判らず、さすが持て余し気味で、子分や弥次馬を叱り飛ばしております。

「お、銭形の」

平次はそこへやって来ました。

「元町の親分、やはり殺しという見当かい」

「身を投げるようなお由良じゃないよ。男という男はみんな寄ってたかってチヤホヤしてくれるんだ。この世の中が面白くてたまらない女だったよ」

「なるほどね」

さすがに仙太は老巧でした。

「死骸を見てくれるかい」

「そいつは眼の毒だが」

そんなことを言う平次を、仙太はお関の家へ案内してくれました。

お茶の水の崖がけに、後ろ半分乗出したようなお関の家の、往来から完全に隠された裏の空地に、お由良の死骸は筵むしろを被せられてあります。

「フーム」

筵を剥いで一と眼——平次は唸りました。抜群に優れたのは才智で、さして美しくはないと思つたお由良ですが、一度「死」によつて浄化されると、それは思いも寄らぬ美しい変貌を遂げているのです。

「切つた傷は一つもないよ——突き落されるまで、黙っているお由良じゃあるまいから、よつ程力のある奴が、橋の上から足でもさらつて、一と思いに投り込んだんだろう。首筋うちみの打撲傷はその時橋架はしげたへでも打ぶつ付つけたのかも知れない」

「待つてくれ、元町の親分。これは一体どうしたことだ」

死骸の首から肩のあたりへかけて、皮下出血らしい不気味な斑点はんでんがあり、首筋のあたりは碎かれておりますが、充分、疑いを持たせた口の中は、何の異常

もありません。

「毒ではないよ。口の中は少しも変っていない」

仙太は平次の顔にこびり付く難しい疑いを解くようにこう言うのです。

「だが、この打撲傷はおかしいぜ」

「橋架でなきや水の中に杭くいでもあったのかな」

「こいつは考えて見ると判らないことばかりだ」

平次はそう言いながら、死骸の上に筵むしろをかけてやって、片手拝みに側を離れました。

「柳屋の親爺おやしが来ているが、逢って見ないか」

「そいつはいい塩梅だ」

平次はガラッ八に合図をして、お由良の父親をつれて来させました。崖の上を削けずったほんの少しばかりの空地ですが、ここで調べるには、往来から見える

氣遣いはありません。

「親分さん方、御苦労様でございます——」

よく禿<sup>は</sup>げた五十年輩の小さい中老人——弥吉は、卑屈らしく二つ三つお辞儀をして手を揉むのでした。

「爺さん、飛んだことだったね」

「へエ、へエ」

「お由良が家を出たのはゆうべの何ん刻<sup>どき</sup>だえ」

「まだ宵のうち、戌刻<sup>いっつ</sup>(八時)そこそここでございます。この節は物騒だから、女の夜歩きは止せと申しておりますが、私に隠れるように、何時の間にかやら見えなくなつてしまいました」

「ちよいちよいそんなことがあるのか」

「へエ——」

気性者のお由良<sup>ゆら</sup>は夜歩きなどは何んとも思つてはいなかつたのでしよう。

「どこへ出かけるか見当くらいはつくだろう」

「夕方、伊勢屋さんが来たようでごさいましたが、店が立て混んでるので、よくは判りません。へエ」

「いろいろ懇意な男があつたようだな」

平次は苦々しくそんなことを訊くのです。

「そんなことはございません。世間では何んと申しますか存じませんが——お由良は伶俐者で、勝手に男を拵えるようなそんな娘じゃございません」

「なる程ね」

それは多分本当でしょう。愛嬌があつて、口上手で、ちよつと喉<sup>のど</sup>がよくて、眼から鼻へ抜ける才気と、人の心を見透す賢さを持ったお由良は、玉の輿のねらいが真剣だっただけに滅多なことで男と関係する筈はなかつたのでしよう。

「それに、近いうちに、伊勢屋の旦那と祝言する筈でございました」

飯田町の酒屋で、ちよつと知られた物持の伊勢屋治三郎は、三年前女房に死なれてから、三十五の男盛りをやもめ暮しをつづけ、お由良が懐ろへ飛び込んで来るのを、長いあいだ待っていたのです。

「お由良を欲しいというのが、大分あつたそうじゃないか」

「それはございました。御浪人の織部鉄之助様も、かずさや上総屋の番頭の金五郎さんも、若吉親方も、ここの息子の幾松さんも——」

お由良の父親は、娘の威力を勘定するように、慕い寄つた男の名前を一つ一つ積み上げるのです。

「お由良は酒を飲んだのかい」

「へエ——」

商売柄、それは訊くだけ野暮だったのでしよう。

「伊勢屋へ嫁にやるといふのは、何時のことだったんだ」

「近いうちというだけで、まだ日までは決っておりません。尤もいざとなれば、私風情の娘ですから明日にも嫁にやれないことはございません」

三

そこへお関が出て来ました。いや、出たというよりは尻ごみをするのを、八五郎に引出されたという方が穏当でしょう。

「ゆうべ、お由良が来なかつたのか」

平次は静かに訊きました。

「へエ——いえ、お由良さんはもう三月も姿を見せません」

生れて初めて御用聞に物を訊かれて五十女のお関はすっかり顫え上つてし

まったのです。

「お前の倅の幾松と、お由良をいっしょにする心算つもりじゃなかったのか」

「へエー、お由良さんが小さい時分には、そんなことを考えたことも言ったこともありますが、年頃になると、男達に騒がれるのが面白そうで、こちとらでは及びも付きませんでした」

お関は何んとなく物悲しそうです。世帯やつれのした、駄菓子屋の五十女は、何も彼も諦めることに馴れた姿です。

「幾松は身体が悪いそうじゃないか」

「世間様は気狂いのように言いますが、人様に顔を合わせるのを嫌がるだけで、別にどうもしたわけじゃありません——あれあの通り」

振り返るとどこすきまの隙間からか此方を見ていたらしい幾松はあわてて物蔭に姿を隠すのでした。



とにかく、剃刀かみそりを持つ稼業には向かなかつたので、母親のもとに帰されましが、乱暴をするんでも、間違つたことを言うでもなく、暗いところに引込んで、何時までも何時までも黙つて、考え込んでいると言つた、世にいうきょうつ氣鬱の嵩じたこしょう症状だつたのです。

つづいて嫌がる幾松を、無理にガラツ八に引出させて見ましたが、そんな具合で筋の通つたことを言わせる望みもなく、ただ二十四という立派な職人が、人附合いもせず、暗いところに引込んでいなければならぬみじめさを、哀れ深く見ただけのことです。

「お前はお由良をどう思う？」

平次はいろいろに問い試みました。が、幾松は、

「――」

蒼白い顔を硬張こわばらせて、何んにも言おうとはしません。洗いざらしの縞目しまめも

判らない袷一枚、月代は伸びるに任せて、手も足も無残に垢あかに塗れたのが、磁石じしやくに引かれる鉄片のように、無気味な二つの瞳ばかりは、空地の隅に転がされた、お由良の死骸に吸い付くのです。

「無駄だよ、銭形の。それより他のを当って見よう」

元町の仙太は、とうにこの気鬱病患者に匙さじを投げております。

それから平次と八五郎はお由良に少しでも関係のありそうな筋を、片っ端から当って見ました。最初にお弓町に住んで竹刀しなひを削っている浪人者の織部鉄之助。

「ほほう、お由良が死んだのか、そいつは大笑いだ。いずれ畳の上で死ぬ女じゃないとは思ったが——」

こう言った調子の、三十近い尾羽打枯らした姿です。

「それに就ついて、お由良が身を投げるような心当りはございませんか」

「ないよ、あの女が身を投げる気になれば世の中を少しは見直す」

「へエー」

「あの女は薄情で伶俐過ぎて、腹の立つ女だが、付き合っていていちゃこの上もな  
く面白い女だったよ。賢い女かしこというものは、美人よりも男を夢中にさせるな」

「——」

「俺も少しばかりの貯蓄たくわえをすっかり費い果して、竹刀削りの内職で命を繋つなぐよ  
うな目に逢っているが、一年ばかりの間散々面白い思いをしたから、あの女を  
怨んでいるわけじゃない——死んだと聴くと少しは可哀想にもなるよ」

織部鉄之助は痩せた頬を撫でて、カラカラと笑うのです。何にかこう虚無的  
になった棄鉢すてばちな諦めを感じさせる男です。

「そのお由良にいつお逢いになりました」

「ゆうべ逢ったよ」

「えッ？」

鉄之助の言葉はあまりに予想外です。

「ゆうべ逢ったのが、そんなに不思議かえ」

「どこでお逢いになりました」

「戌刻いっつ（八時）過ぎに、たった一人でここへやって来たよ——尤ももっと、お由良には言わないが、誰か跟ついて来て外で見張っている様だったが、——俺のところへ来たのは初めてじゃない。時々そんなことをする女だったよ。昨夜は久し振りだから少し驚いたが——尤も用事もあった」

「どんな用事で？」

「近いうちに、伊勢屋へ嫁入りすることになったから、その心算で——という丁寧な挨拶だ。少しは小癩こしゃくに障ったが、起請を取交したわけでも、夫婦約束をしたわけでもないから、文句の言いようはない。正直にお祝を申上げて帰って

貰ったのさ。これが武士のたしなみと言うものだ、ハッハッ

洞うらろな笑いがケラケラと響きます。

「それつきりで」

「残念ながらそれつきりだよ——お由良という女は、そう言った女だ。今までいろいろの男と付き合つて、さんざん良い心持に自惚れさせているから、いざ嫁入りとなると、後の崇たたりのないように、自分で一々始末を付けて歩いたのさ。あれほど確かな縁切りはない」

鉄之助の瘦せた頬には、苦渋な笑いが淀むのです。

「それで旦那は？」

「綺麗さっぱり諦めたよ。本人から後腐れないような挨拶をされちゃ、男の方から未練を言う筋はあるまい。——あの女は多勢の男へ附合つて、その一人一人を鏡にして、自分の才智や愛嬌や弁舌や容貌きりようを映して楽しんでいたんだね。

俺や金五郎や若吉に気があったわけでも何んでもないのさ、あの女の心はいつでも勘定ずくで冷たくなっている——三十五になる意気地のない伊勢屋の治三郎のところへ嫁ゆく気になったのはそのためさ。——あの女は火の燃えるような女だが、昨夜は冷んやりとするほど冷えきっていたよ。へッ、へッ」

鉄之助はそう言いきって、にがにがしく笑いを絞り出すのです。

「旦那は昨夜どこへも出ませんか」

「お由良を追っかけて行って、野良犬のように斬って捨てようかと思ったが、止したよ。祖先や故主のお名が出ちや濟まない」

「——」

「婆しアに五合取って貰って、手酌でやらかして寝て了しまった——惜しいと思ったが、一と足も出なかったよ」

お勝手の方でゴトゴトやっている六十がらみの雇やと婆いさんに訊いても、その言

葉に嘘はありません。

#### 四

神保町の質屋、——上総屋の番頭金五郎は、お由良ゆらが殺されて御用聞が来たと聴いて、ただもう顛え上がってしまいましたが、ゆうべ宵のうちにお由良が訪ねて来て、かねての打合せの合図で路地の外に誘い出され、ほんの二た口三口話をしたつきり、中へ入って多勢の手代達といっしょに寝てしまったことに何んの疑いもありません。

「お由良は何んの用事で来たんだ」

「それがその大変なことで——」

「大変なこと？」

「へエー、近いうちに伊勢屋へ嫁よめくことになったから、その心算でいてくれ。何んの約束をしたわけでもないから、黙っていてもいいようなものだが、治三郎さんが気にするから、はつきり断つて置く。あとで彼れこれ言ってくれないように——という挨拶でございました」

三十男の金五郎は、自分にかかる疑いを極度に恐れて、ワクワクしながらこれだけのことを言いきりました。

「ひどくはつきりしているんだね——ところで、お由良をうんと怨んでいる者がある筈だが、心当りはないのか」

「怨まじんでいるとすれば、お関母子でございましょう。あの幾松という男は子供のとき飯事まじ見たいな話でしょうが、夫婦約束までしたそうで、長いあいだお由良をつけ廻まわしてましたよ。それを五月蠅うるさがって、一度はつきり断つたそうで、幾松はそれつきり柳屋へ来ませんが、その代り気が少し変になったとかで、と



うとう海老床えびどこも止したと聞きました」

「それつきりか」

「へエー」

金五郎は不安と恐怖にさいなまれている様子で、ゆうべお由良を跟つけていた者にも気が付かず、それ以上は何を訊いても要領を得ません。

もう一人、お由良をつけ廻した大工の若吉は、四五日前から佐倉の普請ふしんへ行つて留守。

「お由良の講中で残るのは、八、お前ばかりだぜ」

「へエー」

「へエーじゃないよ、昨夜どこへ行つたんだ。真つすぐに白状しな」

「驚いたなどうも。——親分のところで碁ごを打つてたじゃありませんか」

「あ、そうか、それで安心したよ。お前はたしかに下手人げしゅにんじゃねエ」

「冗談じゃありません」

八五郎まことに散々です。

「だが、外の男は、此方から押し掛けて行って、後腐れのないように断ったお由良が、八五郎だけは懐ろに突っ張っている十手の手前もあるから、今日半日神妙に付き合つてよ、天神様の藤を眺めながらお前に止めを刺そうという段取りだったのさ。台詞はせりふこうだ——八五郎さんとは夫婦約束をした覚えはないから、これから逢つても口もきかないように——とな」

「へッ」

八五郎は照れ隠しに鼻を撫であげます。

平次は時を移さず飯田町の伊勢屋へ飛んで行きました。

「主人の治三郎はいるかい、俺は神田の平次だが——」

「へエ、私とその治三郎でございますが——」

帳場で心も空の算盤そろばんを弾いているのは、三十五六の青白い中年男。意気地のないような、そのくせ一国者らしい治三郎でした。

「お由良の死んだことは知ってるだろうな」

「へエ——」

それを承知の上、素知らぬ顔で算盤を弾かなければならぬ治三郎の心持は、平次にも解りません。

「それをどう思う」

「へエ」

「店の者のいないところで、ゆっくり話を聴きたいが——」

平次は四方に眼を光らす手代や丁稚でっちたちの顔を見渡して、とうとうこうきり出さなければなりませんでした。

「それではどうぞ此方へ——」

奥の一と間、店の者の眼の及ばないところに行くと、平次は改めて訊きました。

「由良は殺されたんだが、心当りはないのか——打ち明けて話して貰いたいが——」

「そのことでございます、親分さん。奉公人たちの手前、私は我慢に我慢をしておりますが、朝から真つ暗な心持で、この先どうして生きていいか見当も付きません」

「——」  
治三郎の言葉はようやくほぐれました。

「お由良は内証ないしよにして置いてくれと、堅く口止めしましたが、実は明日にもお由良を引取って、内祝言する筈さかなでございました。店の者にも内々申し聞かせ、出入りの酒屋、肴屋かしら蔦頭にも話して、内々仕度をしていると、あの騒ぎでござ

います。私はもう、どうしていいかこの先生きて行く張り合いもないような心持でございます」

「——」

治三郎の涙声になった愚痴ぐちを聴きながら、平次はチラリとガラッ八に眼配せしました。治三郎の言ったことを、店の者や出入りの商人たちに確かめさせる心算でしょう。ガラッ八は早くもその意嚮いこうを察すると、よく馴れた獵犬れつけんの様に素早く座をはずして、どこかへ行ってしまったのです。

「誰があんな惨むじたらしいことをしたかわかりませんが、どうか、敵を討って下さい。お願いでございます、親分」

「お由良を殺したのは誰だろう、見当くらは付かないものかな」

平次は脈を引きました。

「何分あの通り、人気者のお由良でございましたから——」

治三郎にも見当は付かない様子です。

「ゆうべはお由良に逢わなかったのか」

「逢いません、——あと二三日の辛抱で、ここへ来て貰えると思いましたが、宵からこの部屋に引籠って、帳面の調べをいたしました」

最後の晩に逢えなかった悲しみが、治三郎をさいなむ様子です。

そんなことで切上げて、伊勢屋を出た平次は、路地の外でハタと心得顔のガラッ八に逢いました。

「親分、治三郎の言う通りだ。祝言は明後日に決まっています。柳屋の親爺は不承知だったが、それはいづれ金で承服させる心算つもりだったんでしよう」

「ゆうべ治三郎は外へ出なかったのか」

「晩飯が済むと、婚礼前に帳面を調べるからと、一人で奥へ引込んだそうですよ」

「今までそんなことがあったのか」

「時々あったようです。十日に一度とか、一と月に一度とか」

「さてここまで来て見ると、お由良を殺しそうなのは一人もないじゃないか。どうしたもんだらうな八」

平次も少し持て余した様子です。

「水道橋へ引返しましょう。お関母子が一番臭いじゃありませんか」

## 五

水道橋へ引返すと事件は急転回をしておりました。

お関と幾松の様子が変なので、多勢の子分に見張らせていた元町の仙太は、  
お関が貧乏徳利びんぼうどっくりの酒を川に捨てるところを見付けて、有無を言わせず、母子を

縛つて番屋へ引立てて了しまつたといふのです。

「銭形の兄哥、氣の毒だが一と足先に下手人を縛つて了つたよ。お関が川へ捨てた酒の中には、石見銀山いわみぎんざんと言つたような毒が入っていたに違いない、——倅の幾松の氣が變になつたのは、お由良のせいだから、昨夜又ケ又ケと縁切話に來たお由良に、毒を盛る氣になつたのも無理はないよ」

元町の仙太は得々として言うのです。

「ゆうべお由良が來ると解つて、毒を用意したのかな」

「さア、そこまでは判らないが——」

平次の投げた疑問の重大さを、元町の仙太は消化しきれない様子です。

「お由良の肩の斑点ふちを、俺は撲なぐつた傷だと思ふよ——毒で死んだのなら、口の中がどうかなくなっている筈だし、胸のあたりにも斑点が出る筈だ」

平次はつづけて疑問を投げました。



「そんなこともあるだろうよ。だが銭形の、お関は白状しているんだぜ」  
「えっ」

「お由良は昨夜亥時よつ（十時）過ぎに、お関母子のところへ来て、あんまりひどいことを言うから、腹を据え兼ねて毒の入っている酒を吞ませたというんだ」  
「待ってくれ元町の、そいつは大変な番狂わせだが、俺が考えていた筋道とはまるつきり違って来る。——お関母子に逢わせてくれないか」

「いいとも」

平次は仙太と一緒に、その足で番所まで伸のしました。

お関と幾松は嚴重に縛られて、口書きを取って奉行所に送られるばかりになつていましたが、銭形平次はその縄を解かせて、さて問い進むのです。

「お由良に毒を飲ませた——と言うそうだが、その毒はどうして用意したんだ。ゆうべお由良の来るのが解っていたとでも言うのか」

「親分さん、聴いて下さい——お由良の母親と私は幼な馴染で、お由良は幾松と一緒に育ちました。お互に言い交さなくとも、大きくなったら一緒にと親同士と言ったことを聴いているのに違いありません」

お由良と幾松が、幼な友達という罫わだちを越えて、楽しい将来を夢みる間だったことは、お関の説明をまつまでもなく明らかかなことです。

そのお由良が次第に賢く冷たくなって多勢の男たちにチャホヤされるに従って、下刺の幾松を疎うとましく見たのはまことに自然な成行で、幾松がそれを悲観して、極度の憂鬱症メランコリーに陥ったのも考えられることでした。

世帯の苦勞に、虐しいたげ抜かれたお関が、伴の憂鬱症を救う唯一の道として、母子心中を企くわだてたことも、また考えられない節ではありません。

「私と幾松と、いっしょに死んでしまえば、それで市が栄えるでしょう。生きている楽しみも望みもない母子が、死ぬ気になったのは無理でしょうか。石見いわみ

銀山の鼠取りを酒で呑んで、一緒に死ぬ気でいましたがいざとなつて石見銀山が手に入らなかつたので、本郷三丁目の生薬屋で、〇〇を買つて来て酒に入れ、幾松と二人で呑んで死ぬ心算でいるところへ、いきなり由良が飛び込んで来ました」(編注)

「お由良は少しは酔っている様子でしたが、——近いうちに伊勢屋へ嫁くことになつたから、古い関係はないことにして、これから道で逢つても口を利かないかも知れない。私も大家の嫁になるんだから、それくらいのことには我慢してくれと、自分勝手なことを言います」

「どうせ死ぬ気の母子ですから、腹か立ちながらもいい加減にあしらつていると、すっかり有頂天になつて、私たち母子が死ぬために用意した酒を、湯呑に

注いで、アツと言う間に二杯も立てつづけに呑んでしまいました。——私も幾松もあつけに取られて見ていると、お由良は言いたいだけのことを言つて、フラフラと出て行きました。酒の中にはうんと〇〇が入っています。私は心配でたまらないから、そつと後を跟けて行くと——」

「すぐ後を跟けたのか」

平次は言葉を挟みました。

「いえ、ほんの煙草を二三服ほどの間はありました。——お由良の後を跟けるともなく水道橋へ行くと——橋の欄干らんかんに凭れて死んでいるのが、ツイ今しがた私の家を出て行ったお由良じゃありませんか」

お関はその時の事を思い出したか、ゴクリと固唾かたずを吞みます。

「それからどうした」

と平次。

「月の光に照らされた死顔を見ると、私は急に死ぬのが怖くなりました。——  
ここでお由良の死骸が見付かると、私と幾松に疑いがかかると思ったので、恐々  
ながら、橋の欄干の間を潜らせて、お由良の死骸を川へ落してしまいました」  
「その時、死骸が橋架はしげたか水除か何かに引っ掛らなかつたのか」  
「いえ、真つすぐに水の中へ落ちましたよ。——大きな音を立てて——私は大急  
ぎで帰って来て、まんじりともせず明してしまいました」  
お関の言うのは、本当でしょう。今は死の恐怖から解放されて、どうともな  
れと言った捨鉢な気持が、疲れ果てた五十女の、自白となった様子です。

## 六

「親分」

「どうした八」

「本郷三丁目の生薬屋じゃ、お関へ○○○なんか売らないって言っていますよ」  
「？」

ガラツ八の報告は平次にも予想外です。

「お関は——鼠が多いから、石見銀山の代りに○○○を欲しいと言って来たが、ひどく突き詰めた様子だし、橋の袂たもとで駄菓子たもとを売っているお関の苦労も知っているから、うっかり毒薬を売るわけにも行かず、番頭と相談して、○○○だと言って、実は砂糖を売ったと——手代が言うんです」

「本当かい、それは？」

あまりのことに平次も驚きました。

「番頭も手代も言うんだから、ウソじゃないでしょう」

「すると、お関母子は砂糖酒を呑んで死ぬつもり心算だったんだね」

「まア、そんなことですね」

「そして、お由良は砂糖酒で死んだことになるわけだ」

「――」

「八、こいつは面白くなつて来たぜ。もういちど振出しに戻つて、やり直しだ」

「どこへ行くんで？ 親分」

「柳屋を調べなかつたのが手落だよ。来るか、八」

「へエ――」

二人は飯田町に飛びました。柳屋はお由良の死骸を持込んで、ひと方ならぬ混雑でしたが、お勝手口からそつと滑り込んだ平次とガラツ八は、親爺おやしの弥吉を物蔭に呼んで、一生懸命の調べを始めたのです。

「お由良の敵を討ちたいとは思わないのか」

平次の問いは唐突ですがこの上もなく効果的でした。

「それは言うまでもございませんよ、親分さん」

「それじゃ、誰が一番お由良を怨んでいたか、そいつを聴かしてくれ」

「そいつは申兼ねますが、——どうしても言えと仰しゃれば——やはり気が変になるほど思い詰めた幾松じゃございませんか」

「お由良が死んで困るのは？」

「私と伊勢屋さんでございますよ。私はまア親ですから当り前で、伊勢屋さんの方はあんなに仕度をして待っていたのですから、お由良が死んで、どんなにがっかりなすつたでしょう」

「そんなものかな——ところで、伊勢屋は本当にお由良に打ち込んでいたに違いない」

平次はせき立てられるような調子です。

「伊勢屋さんから、大変な起請きしよが入っていましたよ、お由良は虎の子のように



大事にしておりましたが」

弥吉が持つて来たのは、治三郎の書いた型の如き起請でその文句は、

二人の夫婦約束は神かけてのものだから、万一変改のあった時

は、お互の身上しんしようを一つ残らず相手にやる——

といった厳きびしいことが書いてあるのです。

「何んと言うことだ。馬鹿馬鹿しい」

ガラツ八が危うく破つて捨てそうにするのを、平次は辛くも止めました。

「そいつが面白いんだよ。——尤も、それほどの約束があつても、肝腎かんじんのお由良が死んでしまつちや何んにもならないが——」

「全く、親分の仰しやる通りでございます。どんな証文があつたところで、本人が殺されたんじや何んにもなりません」

弥吉の愚痴ぐちが際限もなく発展しそうなのを外らして平次とガラツ八は外に飛

び出しました。

「どうしたものでしょう、親分」

ガラッ八は袋路地へ逃げ込んだ野良犬の様な顔をしていました。

「だんだん判って来るじゃないか——もういちど水道橋へ行つて見るとしよう」  
平次は水道橋へ来ると、橋の袂を捜して手頃な沢庵石たくわんいしほどの石を見付けました。

「親分、そんな石をどうするんで？」

「こいつを手拭に包むのさ、——その手拭の端っこを持って、力任せに振廻したら、どんなことになると思う」

「あぶないね、親分」

「お由良はこの石でやられたんだらう。お関は死骸を真つすぐに水に落したというが、死骸の首から肩へかけての斑点はんでんが変じゃないか——多分声をも立てず

に、あつと言う間に死んでしまったことだろう」

「――」

「橋の欄干らんかんの下に倒れていると、そこへお関が来て、てつきり毒酒にやられた  
と思つて、欄干の下を潜らせて水へ落した――」

事件の輪郭が次第に明白になつて行きます。

「すると親分――」

「お由良を殺したのは、宵からお由良を跟つけていた奴だ――人知れず家を脱け  
出せる人間だよ――そんな都合の良い家に住んでいるのは、八五郎と――」

「親分」

「もう一人ある筈だ」

平次はそう言いながらもういちど飯田町に引返すと、伊勢屋に飛び込んで主人の治三郎を縛つて了つたのです。

「あ、親分。私じゃない、私は」

「黙れッ」

平次か取合いそうもないと見ると、

「お由良は恐しい女でした。あいつを殺さなきゃ、私が殺されるか身上しんしやうを奪とられたに違いありません。親分、どうぞお見逃しを願います。そのお礼には」

「そんなことはお白洲で言えッ」

平次は耳にも入れようとしません。

×

×

治三郎を送ってから、ガラッ八はたまり兼ねて平次に絵解きをせがみました。

「あつしには少しも判らない。どうして治三郎は明後日は祝言という間柄のお由良を殺したんです」

「うっかりお由良の才智に引っ掛った治三郎は、中年者だけにいろいろ考えた

のさ。第一、あんな起請文きしょうもんを商人が書くというのは無法だ。うっかり治三郎に落度があつて破談になれば、伊勢屋の身上をお由良父子に巻き上げられるじゃないか」

「へエー」

「治三郎は怖くなつたが、お由良と別れる手段も口実もない。そこで——お由良に言い寄つた男が多いようだが、祝言してからそんな男に因縁いんねんをつけられては困る——と言ひ出した」

「——」

「お由良はそれを聞くと、今まで念入りに愛嬌をふりまいていた男や、執念深く自分をつけ廻していた男のところへ、片っ端から押しかけて縁切り話を叩きつける代り、すぐ祝言してくれと治三郎に持ちかけたのさ」

「——」

「治三郎はあの晩柳屋へ行つてお由良に逢い、その話を聴かされて女のヌケヌケした調子に心から嫌になった。——念のために後をつけて歩くと、お由良は一軒一軒男を訪ねて、キビキビと片付けて歩いた上、先々で一杯ずつ引っかけて、水道橋へ来た時は女のくせに大虎だ」

「——」

「こんな女と無理に一緒になることを考えると、治三郎は心の底から怖くなつた。お由良が酔つて正体のないのを幸い、手拭に石を包んで二つ三つ喰らわせ、息の絶えるのを見定める隙もなく逃げ出した。——人の蹙音あしおとを聞いたんだろう。その蹙音が母子心中をやり損ねたお関だったのさ」

「なるほどね」

八五郎もようやく事件の真相が判つたような気がしたのです。

「だから、あんな氣の多い伶俐な女と掛り合っちゃいけないよ。女は正直で生

一本なのが一番良い——」

そう言う平次の胸には、恋女房お静の純情な浄らかさが、活々いきいきと浮彫うきぼりされているのでした。

治三郎のお白洲の調べが平次の推理と寸毫すんごうの喰い違いもなかったことや、お関幾松母子が、平次の助力で平和な幸せな日を取戻したことは改めて書くまでもありません。

(編注)

底本で○○と伏字になっている箇所は、嶋中文庫版銭形平次捕物控では「附子」となっていますが、底本のママとしました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月



底本——「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>